

## 巻 頭 言

### キーワードは「連携」



木原 元央  
Motohiro KIHARA

日本加速器学会が2004年4月1日に発足しました。

ここに第1号の会誌をお届けし、学会の発足をともによろこびたいと思います。

いまなぜ学会なのか。ここで、あらためて考えてみます。

わたくしは、学会運営のキーワードに「連携」をあげています。それには「内なる連携」と「外に向けた連携」があります。

「内なる連携」は、いうまでもなくわれわれ内部の連携です。研究機関には明確なミッションがあり、プロジェクトで成果を求められます。学会は、加速器集団としてのポテンシャルを上げることに役立ちたい。広い意味での「人づくり」です。

産学連携は、加速器の場合、「内なる連携」であることはいうまでもありません。加速器は産業技術に依存している一方、加速器技術の開発が産業への刺激要因となっています。この意味で、産学の連携はこれからも重要です。加速器技術がますます高度になっている現在、加速器コミュニティの中で技術情報の伝達・交流を促進し、その共有性を高めることは、加速器科学の発展にとって不可欠です。これは学会が活動の目標に掲げるテーマです。

「外に向けた連携」とは、大きくいえば社会への貢献です。21世紀の社会のキーワードは医療・福祉、情報・通信、環境といわれています。すでに加速器は、医療、生産の現場だけでなく、物質の分析手段として幅広く浸透していますが、新たに注目されているナノテクノロジー、バイオテクノロジーにとって、加速器は一層重要な位置を占めるでしょう。すでに動いている先進医療分野、タンパク質の構造解析は言うに及ばず、半導体リソグラフィや超微細加工技術の分野では今後大きな展開が予感されます。加速器集団として、社会の風を的確にとらえる必要があります。学会にはその任務があります。

社会への貢献にはもう一つ大切なことがあります。

加速器はもともと原子核や素粒子の研究のために発達しました。いまでは、素粒子の研究は宇宙の研究と不可分の関係にあります。素粒子や宇宙の研究はわれわれに富をもたらすことはありません。しかし、夢やあこがれを与えることができます。いまの時代、これほど貴重なことがあるでしょうか。

そのためには、「学者は芸人にならんかったらあかん（森毅）」です。輝いているところには、若い人も魅力を感じます。こういうことに貢献するのも、加速器学会の重要な仕事です。

そういうわけで、いま学会を立ち上げたことは大変重要な一歩なのです。よい活動をしているではないかと認められるよう、努力しましょう。

\* 日本加速器学会会長（高エネルギー加速器研究機構）  
Particle Accelerator Society of Japan  
E-mail: motohiro.kihara@kek.jp